

動物園における幼児の動物ふれあい活動に関する考察

百瀬 ユカリ*

Animal Assisted Education for Children in Petting Zoo

Yukari MOMOSE

1. はじめに

急速な社会の変化によって、子どもたちを取り巻く環境に大きな変化が生じ、子どもの育ちにとって大切な社会体験や自然体験が不足してきている。特に幼児期の子どもにとって、生きている教材としての動物は重要なものである。しかし、幼稚園や保育所の保育現場において、動物の飼育は行われているものの必ずしも全ての園で実施されているとも限らない。¹また、家庭で動物を飼育するのは限られた条件にあるので、全ての子どもに動物のふれあいの場が常にあるわけではない。

家庭で難しい動物とのふれあいは、保育現場では保育内容として領域「環境」の中に設定されている。幼稚園教育要領で、領域「環境」の中での身近な動植物へのかかわりは「(3) 身近な事象や動植物に対する感動を伝え合い、共感し合うことなどを通して自分からかかわろうとする意欲を育てるとともに、様々なかかわり方を通してそれらに対する親しみや畏敬の念、生命を大切にする気持ち、公共心、探究心などが養われるようにすること。」と「内容の取扱い」の留意事項として記されている。²また、保育所保育指針にも保育内容「環境」として「身近な動植物に親しみを持ち、いたわったり、大切にしたり、作物を育てたり、味わうなどして、生命の尊さに気付く。」と取り上げている。³このように、幼児期の子どもにとって、動物とのふれあいは必要とされているが、家庭外、園外の動物ふれあい活動については、どのような実態が見られ、利用されているのであろうか。また、動物ふれあいの場が限られている中、子どもたちは動物に対して適切なかかわりができているのだろうか。また、「動物」を扱うが故の問題もあると思われる。そこで、先行研究からの情報整理を行い、実際に動物園の動物ふれあい活動の担当者から見た、現代の子どもの動物ふれあい活動について聞き取り調査を行った。そこでの子どもたちの様子から見えてくる動物ふれあい活動の現状と課題について明らかにし、動物ふれあい活動の改善点や、これからに期待したいことを見出そうとするものである。

2. 動物ふれあい活動に関するこれまでの研究

日本の幼稚園では、明治時代から動物を保育に取り入れ、身近な動植物について教えるようになったが、はじめは生きた動物を飼育するのではなく、絵を用いて説明していた。その後、京阪神地方のいくつかの幼稚園で動物飼育が始まったが、大正時代に入ると京阪神以外でも動物飼育がおこなわれるようになってきたようだ。⁴幼稚園での動物とのかかわり（適切な飼育活動）によって、「動物を愛護し、自然に親しむ子どもを育てる」といったねらいから「生命を大切に作る気持ち」などが養われるようにとその意味は大きくなり、幼稚園教育現場での動物とのふれあいがますます重要性が高まってきていることを物語っている。⁵

そこで、改めて本研究でのテーマである動物ふれあい活動について先行研究を整理してみると、2015年2月16日現在の国立国会図書館蔵書検索NDL - OPACによる論考検索では、次のような結果であった。「動物」「幼児」の二つをキーワードとする論考は、187件であった。「動物園」「幼児」の二つのキーワードだと13件であった。「動物園」「ふれあい」の二つのキーワードだと28件で、その中で子どもに関する内容を取り上げているテーマの論考は4件であった。⁶「ふれあい動物園」は、11件だが、子どもの動物とのふれあい体験に関するテーマの論考は1件のみであった。⁷

この内容での先行研究の多くは、子どもの動物とのふれあい体験に関するテーマというよりも、ふれあい動物園の動物側のストレスについて扱った内容が多く見られた。このように、「動物ふれあい活動」「ふれあい動物園」に対する幼児の関わりを論究したものは極めて少ないので、その分野について先行研究を基礎にさらに研究していくことで、幼児期の子どもに必要な活動としての動物ふれあい活動やふれあい動物園に関して、未解決の分野への成果につなげられると思われる。実際に動物園の「動物ふれあいコーナー」（名称は、動物園によって異なる）の担当者に関き取り調査を行い、現状と課題を考察していくことにする。

3. 動物園の動物ふれあい活動担当者への聞き取り調査より

(1) 調査方法

①調査対象：東京都23区内にある動物園の中で、無料で動物ふれあい体験ができるコーナーのある園でのふれあい動物担当者（※交通の便が比較的良く、無料であることで、気軽に参加できると考えたため、このような条件で抽出。全4ヶ所）

a. 目黒区立碑文谷公園こども動物広場

所在地：目黒区碑文谷六丁目（最寄駅：東急東横線 学芸大学駅下車徒歩6分）

概要：日ごろ動物と接する機会の少ない都会のこどもたちが、ポニーや小動物にふれあうことのできる貴重な場所である。中学生以下のかたが対象の施設ですが、周りから動物たちの様子を見ることができるので、大人の方々にも親しまれている。年1回のイベント「ポニーまつり」では、通常のプログラム以外に、動物小物の販売・人形劇・ゲームコーナー・バザー・模擬店など様々な催しが行われる。^{8・9}

休園日：毎週月曜日及び祝日の翌日（月曜日が祝日と重なった場合は月曜日は開園し、その翌日は休園）、年末年始（12月28日から1月4日まで）

b. 板橋区立こども動物園 本園

所在地：東京都板橋区板橋三丁目東板橋公園内（最寄駅：都営三田線 板橋区役所前駅下車徒歩10分）

概要：板橋区立こども動物園は都営三田線の板橋区役所前駅から徒歩10分、住宅街に囲まれた東板橋公園内に併設されたアットホームな動物園。

ヒツジやヤギ、ポニー、ヤクシカ、ニホンジカやウサギ、モルモットなどの小動物、フラミンゴなど鳥類が飼育されている。放し飼いにされたヤギやヒツジに触ったりエサやりができる「はなしがい広場」やポニーの体験乗馬やモルモットの抱っこコーナーなどがあり小規模ながら動物と身近に親しむことができるとあって、親子連れでにぎわう。担当者は、常勤はここに7名と高島平分園に3名いる。運営主体が、どちらも公益財団法人ハーモニイセンター¹⁰の職員である。

開園時間 10時～16時半（12月～2月は16時）

c. 板橋区立こども動物園 高島平分園

所在地：東京都板橋区高島平八丁目 徳丸が原公園内（最寄駅：都営三田線高島平駅下車徒歩5分）

概要：飼育動物は、ほ乳類が、ヒツジ・ヤギ・ウサギ・モルモット・リスで、鳥類が、ハッカシロドリインコ・クジャクバトである。

「はなしがい広場」では、ヤギやヒツジと伸び伸びふれ合えるコーナーで、直接エサやりもできる。

開園時間：午前10時～午後4時30分（12月～2月は午前10時～午後4時）

休園日：毎週月曜日（祝日の場合は直後の平日に振替）12月29日～1月3日

料金：無料¹¹

d. 公益財団法人えどがわ環境財団江戸川区自然動物園

所在地：東京都北葛西3丁目 行船公園内（最寄駅：東京メトロ東西線「西葛西駅」下車徒歩15分または都営バス利用）

概要：江戸川区立行船公園内にあるレッサーパンダ、ペンギン、プレーリードッグ、リスザルやワラビーなど約60種550点の動物と会える楽しい動物園。

開園時間：午前10時から午後4時30分（土曜日・日曜日・祝日は午前9時30分から；11月から2月は午後4時まで）；夏季（7月21日から8月31日）は午前9時30分か

ら午後4時30分

休園日：月曜日（祝日の場合は翌日）、年末年始・入園料：無料

江戸川区自然動物園には無料で入園できる動物園としては、比較的多くの種類の動物に出会うことができる。¹²

②調査方法：事前に許可を得た上で、動物ふれあい活動の担当者（責任者）に、聞き取り調査を行う。どの担当者にも同じ質問紙を見ながら、質問する。各問に回答して貰う。時間は40～50分程度。実施時期は2015年2月～3月。

③調査内容：動物ふれあい体験（動物ふれあい活動）の実施状況について、担当者の数、動物の種類、対象年齢、子どもに人気のある動物は何か、どのようにかかっているか、最近の子どもの様子で印象的な場面、かつてと違うと感じることはどのようなことか、今後について（予定していること、希望など）、困っていることなど

(2) 聞き取り調査の結果（順不同・取材順）

①A 動物園ふれあい動物コーナー担当者への聞き取り

a. ふれあい体験の実施状況

種類、内容、時間、料金は、次のとおりである。

・小動物のふれあい：モルモットやウサギ、犬などの小動物をさわったり、抱っこすることができる。午前10時から午前11時30分まで、午後1時30分から午後3時までで無料。

・どうぶつクラブ：動物たちの世話をするボランティア活動。参加費無料。

以下、有料の活動となるが、同園にて行われている動物ふれあい活動の一環として、参考までに紹介された内容である。

・ポニー引き馬：公園内のコースをポニーに乗って往復する。引き馬なので小さな子どもでも安心。中学生以下が対象。幼児は保護者の付き添いが必要。午前10時から午前11時30分まで、午後1時30分から午後3時まで1人1回200円。

・ポニー教室（個人）：3か月の定期申込制で小学生と中学生の2教室がある。動物の世話や乗馬を通じて生きものへのいたわりや集団活動での協調性を養う。開園日の午後3時から午後5時まで。期間中何回でも参加できる制度。募集は年4回（応募多数の場合は抽選 3か月定期登録制 1期2,300円）。

・ポニー教室（団体）：動物の世話や乗馬など、利用グループごとにメニューを組み実施する。午前10時から午前11時30分まで（週5日）、午後1時30分から午後3時まで（週3日）、午後3時から午後4時30分まで（火曜日）一教室4,500円。

ここでの動物のふれあい活動は、33～34年前から実施されている。前述のように、定休日以外毎日2回（午前10時～11時30分、午後1時30分～3時）行っているが、参加者は一日100人以上で、多い日は600人以上の来場者がある。

広さとしては、都心としては広い敷地で、ポニー広場は、元50mプールがあった。

銀行から区が買い取った土地とのことで、ふれあいコーナーと合わせて1000㎡はある。担当者は常勤は6名で、大学生ボランティアに随時手伝ってもらっている。ふれあい動物の種類（1回に開放する動物）は、モルモット15匹、ウサギ5羽、イヌ2頭である。その他にポニーに1歳児が母親と乗るプログラムがある（その他午前中に月に1回9クラスある）。

b. ふれあい動物コーナーの利用者の様子

子どもに人気のある動物は、モルモット（汗腺がないので、弱りやすい、秋に死んでしまうことがある）である。子どもは、えさやりが大好きだ。最初はこわごわ触っているが、慣れてくるとにこにこしながら関わるようになる。しかし、慣れてきても、馬にも力加減がわからないような扱いをしている。

また、親の方が積極的で、子どもは触りたがらないということもよく見られる。最近の子どもの様子の印象に残った場面としては次の3例ある。

その1: 3~4歳くらいの男児が、犬のしっぽをおもちゃみたいに引っ張って、犬にかまれた。このようにするのは女兒の場合もある。

その2: 2歳くらいの子どもが、馬の下をくぐるうとして蹴られた。親が確実に子どもを見ていないので起きた状況である。親が自分勝手なことをしていることがほとんどで、目を疑いたくなる（おしゃべり、ケータイ）。どうも、ここへ来ると、気分が開放的になっているようである。

その3: 親が、「こわくないから、（えさを）あげなさい！」と無理に子どもに餌やりをやらせることが多く見られる。子どもが小さければ小さいほど、エサやりの相手（動物）は、とても大きなものであるので、無理にやらせるのは良くない。これは、動物嫌いになってしまうので、絶対に良くないといえる。動物のふれあい活動としては、この体験はやってはいけないことだ。このようなことをすると、記憶として動物は嫌なもの、動物嫌いになってしまうからである。

こうした動物とのふれあい活動をしている中で、かつて（5年から10年前）とずいぶん様子が違うと思うことは、子どもの姿としてとにかく動物に慣れていないことである。ゲーム的というべきか、動物を落としたら死ぬ、そういうことがわからない。モルモットの扱いが乱暴すぎる。モルモットを落とすと、前歯が折れるのに、子どもが平気でばいっと落とす。親も見えていないのでなかなか注意ができない。

そして、今の親についての印象は、「動物とのかかわりの体験が無いなあ」と思う。動物とのふれあいがどうかというより、ここへ来てまでも自分の楽しみに夢中になってしまう。スマホをずっと見ていたり、いわゆるママ友同士の会話が途切れないので、事故につながる。しかし、何かあると（例：ポニーの引き馬体験のコーナーを仕切る柵に子どもが寄りかかって倒れた時）スタッフにクレームは言う、というのが実態である。

このような現状ではあるが、子どもの姿としては、基本的には今も5年前もたくましさは変わらないと思う。子どもたちのチャレンジ精神や、好奇心など、動物とのふれあ

いを通してさまざまな経験を積んで欲しい。

c. 今後の予定、希望など

これからも自閉的な子どもへの活動としての展開をしてきたい。ここは区の施設なので、障害者団体が優先される。積極的に取り組んでいこうと考えている。また、幼稚園・保育園の遠足、団体利用（ポニーのブラッシング、餌やり）、ふれあいコーナーはさらに活用してもらえるように動いていきたい。

一方で、予算が足りないので、水はけ問題がなかなか解決できない。朝から雨降りの日のプログラムに変更や中止になるので、これが改善されるとよい。また、人手が足りないのも現状であり、人としての寄付というのが適切であるのか、ボランティアが来てくれるのでありがたいところである。

動物ふれあい活動をしてきて、やはり、地域とのかかわりが一番大事だと思われる。近隣の住民の方が運営している公園クラブの方々と協力して、手伝っていただいていることがとても大きい。こうしたつながりに感謝しつつ、今後への希望を考えると、プログラムの雨天中止が心苦しいので、インドア化したい。運営側としての評価の一つに、利用者の人数があるのも現状で、是非一人でも多くの方に利用して欲しいと思う。

d. 幼児期に動物とふれあう体験について

障害のある人への区別をしなくなる（ノーマライゼーション）ということが実感できている。特に、ここでの動物クラブでの活動で、軽い障害を持った子どもがメンバーにいるが、分け隔てなく子ども同士で動物の世話をしている。声かけも、みんな同じ次元で進めていて、どの子どもにとっても動物の世話を愛情をもって行う居場所となっていることがわかる。そして、こうした人と動物の仲間を通して、心豊かになっていく。幼児期に動物とふれあう体験をして、動物への優しい気持、もっと世話をしたいと思うことが、その後の動物クラブの活動に確実につながっているため、必要な経験だと思う。

また、幼稚園・保育園の団体利用は、継続して来ているところは、子どもたちに明らかに変化が見られる。（一方で、餌やりは、動物にかまれるのでやらないという園もあるのも事実。）動物を扱う現場としては、動物とふれあう体験は大事だと思うので、どんどん広めたい。

② B 動物園ふれあい動物コーナー担当者への聞き取り

a. ふれあい体験の実施状況

定休日以外毎日2回で、時間は午前11時30分からと午後3時30分からである。

ここでは30年前から実施していて、平日は一日100人程度で、GWは700人くらいふれあいコーナーに来場する。多い時は、一日4600人以上来場者がある。

ふれあい動物の種類（1回に開放する動物）は、モルモット80匹、ウサギ5～6羽、ヤギ13匹、ヒツジ3頭、シカ1頭のほか、柵の中のポニー4頭も顔を出す。

対象年齢は、特に制限なしだが、小さい子どもは大人が同伴して欲しい。

b. ふれあい動物コーナーの利用者の様子

子どもに人気のある動物は、モルモット（主に未就園児と母親の利用が多いので、小動物として人気）である。幼稚園の帰りに毎日寄って、ヤギに餌をあげている子どももいる。

かかわり方としては、最初はこわごわ、慣れてくるとにこにこしてくるという印象だ。見ていると、子どもたちは、えさやりが大好きである。ところが、中には馬にも力加減がわからないような扱いをしている子どもがいる。子どもなりの愛情表現なのか、いきなりヤギに抱きつく様子が見られる。ヤギは頭突きしてくる可能性があり、とても危険な行動である。また、動物にしつこく触ったり、力いっぱいぎゅーっとする子どももいる。こうした様子を親がとにかく見ていない。子どもは勝手に動物園に出入りしていることもある。

また、親の方が積極的な様子として、子どもが嫌がっているのに無理やりポニーに乗らせようとするのだ（※無料で乗れる）。子どもは触りたがらないのに、動物に触らせようとする親もいる。嫌がるのは男児の方が多い。女兒の方が動物好きの印象が大きい。

親が見ていない時に、子どもがモルモットを落として、モルモットの前歯が折れたことがある。ある時は、モルモットを勢いよく落として、前足がグラーンとして、骨が折れてしまっていた。

最近のふれあい動物活動の様子で印象に残った場面は、おじいちゃんがクレームを言ってきたことである。餌やりができる時間に、用意した餌のニンジンがあまっているのを見て、何回も与えようとするのだ。「あまっているんだからいいじゃないか!」とたいそうな剣幕だった。一人が与える餌の数が決まっているので、ルールは守っていたきたいのである。それを知っている大人が、餌（ニンジン）を家から持ってきて与えていた。これもルール違反なので注意してやめてもらった。

かつてと違うなあと思うことは、子どもの姿というより、親が子どもを見ていないということだ。混む時はアナウンスを徹底して、注意してから一緒に入ってもらっている。子どもの姿では、ヤギやヒツジの横から触ろうとするなど、動物のことがわからないので自分勝手に、自然体で遊んでいるようにも見える。好きな子どもは、半ば興奮して後ろから追いかけている。しかし、親は見えていないのがほとんどである。従って、運営側としては怪我や事故が無いように、ここがスタートした時より注意が多くなっているかもしれない。そのためか、大きな事故は無い。

努力の結果、本園だけで、年間入園者数が15万人から、30万人になった。

c. 今後の予定、希望など

これからも障害児の利用（3歳から6年生まで）。1回20人の乗馬体験（1分くらいの乗馬）を推進していく。これは、春、秋の年に2回行っているもので、参加している子どもにとっては、「馬に乗れたことがすごい」（満足感・達成感）といったイメージである。

保育園への出張ふれあい動物園を年間16～17園、小学校への生活科に（11月～3月）

実施している。子どもたちの反応がとてもいいので、今後も続けていきたい。

遠足としては、春、秋が比較的多いが、近所の保育園は、毎日見て帰る。子どもの姿に明らかに変化がみられる。

最近の切実な問題は、職員への待遇に関してのことである。ここは区との契約なので、3年契約ということも少々不安定感の要因かと思う。人員増員は難しいなか、10月の親子まつりは、1日で1万人越えになり、臨時にお手伝い要員は依頼している状況である。

d. 幼児期に動物とふれあう体験について

保育園の団体利用は、継続して来ているところは、子どもに明らかに変化が見られ、動物のかわいがりがかたが上手になっている。その中から小学生の「動物クラブ」の活動につながっている。とても熱心な子どもが多く、実習生より上手に世話ができる場合も少なくない。現場としては、動物とふれあう経験は大事だと思うので広めたい。

③ C 動物園ふれあい動物コーナー担当者への聞き取り

a. ふれあい体験コーナーの実施状況

モルモットだっこコーナーで、スタッフが選んだモルモットをだっこできる。大切にかわいがってかかわれるように、はじめに「動物クラブ」の子どもから注意事項の説明がある。そこでのアシスタントも、「動物クラブ」の子どもたちが行う。

定休日以外の毎日2回、午前11時からと午後3時から体験できる。参加者は、一日当たり、イベントの時は300～400人、平日は120人程度、土・日は1000人程度である（※30年前から実施している）。

広さは、テニスコート1～2面程度で、担当者は、常勤3名とアルバイト職員で交替しながら行っている。

ふれあい動物の種類（1回に開放する動物）は、モルモット5～15匹（全てメス）、ヤギ7匹、ヒツジ2頭である。開放するヤギの角は、小さい頃に切つてある。牧場生まれで、動物園育ちなので、性格はとてもおとなしくて攻撃性が無い。ヒツジは、GWイベントで毛を刈る。1頭から3キロとれる。それをきれいに洗って、製作に使っている。冬のイベント、毎週日曜日 ゲームも行う。

対象年齢は特に制限なしだが、小さなお子さんは保護者と入ってもらうようにしている。エサやり時のお願いとして、動物園で用意したエサのみを与えてもらう。職員が渡した野菜以外は与えないようにしている。自宅から持ってきた野菜は与えることができない。エサやりができるのはヤギとヒツジのみ。ビニール袋などは持ち込み禁止（食べると死んでしまうため）。

b. ふれあい動物コーナー利用者の様子

子どもに最も人気のある動物は、モルモットである。（主に未就園児と母親の利用が多いので、小動物として人気）印象的な姿として、平日、毎日来る親子さんがいる。お気に入りのモルモットがいて、「ハウルちゃん、アンズちゃんいる？」と言ってくる。いないと不機嫌になるが、ほかのモルモットのかわいらしさを伝えると機嫌を直してか

わいがる。

どのようにかかわっているかについては、最初はこわごわ、慣れてくるとにこにこする子どもが最も多い。だが、子どもなりの愛情表現として、いきなりモルモットに顔を近づけたり、モルモットをぐちゃぐちゃにしてかわいがる、膝に乗せて頬ずりするといった様子が見られる。人形と違って、小動物は動くのが楽しいのだろうと思う。モルモットは、反撃しないおとなしい動物なので、扱いやすい。モルモットは、一匹一匹の毛並みが違う。触り方によっては嫌な思いをしているはず…。モルモットの気持ちがわかるようになってくれることを願って日々ふれあい活動を見守っている。

また、親の方が積極的な姿として、子どもが嫌がっているのに無理やり「膝の上にモルモットを置いて!」と言われる。子どもは嫌がって、モルモットを落としてしまったことがある。(モルモットの口の周りが切れてしまった。)年に一度程度、前足の骨折することがある。逆に、親が消極的で、子どもが積極的な場合もある。母親は「私はネズミはだめなので」と言って入ってこない。スタッフに子どもを託して、母親はサークル内に入ろうとしない。そうかといって、じっくり子どもの様子を見ているわけでもないという場合がある。

子どもが動物を嫌がるのは男児の方が多い。女兒の方が動物好きの印象が大きい。最近の子どもの様子の印象に残った場面は、姉妹でここに来て動物とふれあっている親子さんの姿…。私は、地域に密着を大事にしている。そういう中で、姉妹が来てくれるのが嬉しい。はじめはお姉ちゃんが母親と通って来てくれた。その子が幼稚園に行くようになり(多分5歳くらい)、妹ができて、毎日、母親と来てくれている。妹さんは1歳くらいで、これからの成長が楽しみである。

ふれあい活動で、かつてと違うなあと思うことは、子どもの姿というより親の姿だ。いわゆるママ友同士で来て、子どもをほとんど見ていないことがある。さらに、職員がいなくなるとスマホを取り出すという親も多い。スタッフが居ると出さないの、人の目は気にしているのだと思う。

子どもが動物とのふれあい活動を通しての大きな事故は起きていない。人が多くて混む時はアナウンスを徹底して、注意してから入ってもらうようにしている。私たちとしては、怪我や事故が無いように徹底して配慮を強化してきたつもりだ。むしろ長い歴史の中で、スタート時より注意が多くなっているかもしれない。それが、結果的に大きな事故ゼロになっているのではないかと思う。

動物の様子としては、モルモットは弱りやすいので、きちんと記録をつけながら、ふれあい活動に出す動物のローテーションを守っている。だいたい、6日間に1回くらいの期間でふれあい活動をしている。体調を見ながら、その時の具合が悪い場合には、別の個体を出すように交替している。年をとった個体は疲れやすいため、特別に配慮している。動物の扱いについては、「動物クラブ」の子どもが手伝う。(動物の持ち方をテストして合格した子どものみ。)

こうしたふれあいコーナーのほかに、年間6回程度、ポニーの特別体験乗馬を行っている。普段はポニー乗馬を行っていない公園で特別にポニー乗馬のイベントを実施する。午前10時～11時30分と午後1時30分～3時の2回で、対象年齢は、満3歳～小学6年生まで（5歳以下は要保護者同伴）である。但し、ポニーの体調や天候により、催しを中止・変更する場合がある。ここで使われるポニーは、他園から連れてくる性格が穏やかで、子どもを乗せるのに適していると定評のあるメスのポニー（1頭）である。普段ここにいるポニーには、乗馬させない。

c. 今後の予定、希望など

地域密着なので、常連さんを増やしたい。ここではスタッフにあだ名がついていて、覚えていただきながら親しみを持っていただきたい。団地が多い場所なので動物を飼えない地域性である。「ギュっとしたら痛いよ、君だってそうだよ、おともだちだってそうだよ」というようなことを動物を通して学べる場にしたい。

親が動物が苦手でも来て欲しい。苦手なら工作やゲームで楽しんで、見ることを楽しんでから動物に慣れていって欲しい。楽しい場所になって欲しい。触れ合うことによっていろいろな面が育つ（いい影響があると思う）。

地域の方には、こちらが仲良くして、もっと来ていただきたい。「また来てもらう工夫」をして（現在も、スタッフがブログで動物園の情報を発信して）いる。広報活動としては、職員がブログを更新している。

無料なので、親子でたくさん動物とふれあってもらうのが一番だと考えている。生きものとしての実感、相手のことがわかる、「そばにいるお友達もいっしょだよ」ということをわかってくれるようにしたい。長期的に通ってくると、ほかの人に教えてあげられるようになるくらい、子どもも変わる。その成長していく姿を見られるのがとても嬉しいし、やりがいを感じる。

親子で来ている子どもが小学校に行ってから、「動物クラブ」に入ってくると大変嬉しい。「動物クラブ」に継続して来ている子どもは、明らかに変化が見られる。

※小学生「動物クラブ」の活動：とても熱心。上手に世話ができる。「お仕事をしてくれる動物たちへ気持ちを込めてお世話をしよう」と話している。

※小学校でのいじめ、喧嘩で力の加減が分からないなどの問題があるが、小さいころから動物にふれあう体験をしていたら、嫌なことや痛いことが分かるようになっていくと思う。

d. 幼児期に動物とふれあう体験について

育ちのワンクッションに、動物ふれあい活動、動物園でのふれあい経験をしてもらいたい。昨今のような小学校での問題が起きなくなるのではないかと、「友達もそうだよ」ということがわかることが大事だと思う。

現場としては、幼児期に限らず動物とふれあう経験は大事だと思うので広めたい。

④ D 動物園ふれあい動物コーナー担当者への聞き取り

a. 動物ふれあい体験の実施状況

32年前から実施している。定休日以外毎日2回、時間は午前10時から11時45分と午後1時15分から3時である。来場者は、平日は一回に50人程度で休日は200人くらいだが、多い時は、一日4600人以上来園があり、動物にふれるのに順番待ちになることがある。

このふれあいコーナーの広さは、学校の教室3室分程度あり、割と広く、団体利用にも対応している。(団体専用コーナーを仕切ることができる。)担当者は、ふれあいコーナーは8人(正規職員1人と5年間の契約社員7人とシルバー人材2人(月に16日:ローテーションに組み込む)で輪番で行っている。

ふれあい動物の種類(1回に開放する動物)は、モルモット15匹、ウサギ5~6羽、チャボ10羽、ヤギ4匹、ヒツジ3頭(すべてメス)と、コーナーの中に柵を設けて、見るだけのウズラ4羽、コールドック2羽がいる。また、フレミッシュジュライアントウサギが1羽(体重7キロ、メス)いて、その名の通り、大きな体格で見入る者を圧倒している。ここにいる動物は、基本的に小さい時からここで育てていて、この環境に慣らしている。メスの方がおとなしいので、ヤギ、ヒツジはメスにしている。対象年齢についての制限は特にしていないが、小さい子どもには大人の同伴をお願いしている。

b. ふれあい動物コーナー利用者の様子

子どもに人気のある動物は、圧倒的にウサギ(見た目がかわいいので人気)である。特に女の子は、ウサギを目当てにここにきている場合が多い。

動物とのかかわりかたを見ていると、最初は恐る恐る、慣れてくるとにこにこしながら撫でたり、抱いたりしている。力加減がわからないような扱いをしている子どももいる。また、ヤギやヒツジを追いかけ回す姿も見られる。ヒツジやヤギはひたすら逃げ回っている。反撃しない。何度も何度も追いかけている場合は注意する。注意してようやくやめる子どももいる。親は注意しない。2~3歳くらいの男児によく見られるのだが、ヤギが頭突きしてくる可能性があり、危険なこともある。追いかける子どもを制止しても、またすぐに始める。しつこく触ったり、力づくで、ぎゅーっとすることもある。とにかく親が見ていない。勝手に子どもだけで、ふれあい動物コーナーを出入りしている場合もある。

また、親の方が積極的で、子どもが嫌がって泣いているのに無理やり触らせようとする人がいる。これは、子どもにとって動物に対して怖い気持が大きい時に無理に触らせると、トラウマになって動物を嫌いにさせてしまうのでやめた方がいいと思われる。しかし、スタッフが口を出せないのが現実である。

最近の子どもの様子の印象に残った場面としては、一番印象に残っているのは、動物の扱い方が雑なこと。目を突いていたり、耳や体をぎゅーっと力いっぱいつかんで持つ。特に背中をぐにゃっと持つなどする。これは、親のせいかもしれない。

親が子ども対応がとても雑で、子どもに注意していない。何をやってもいいと思って

いる(かのよう)。ママ友と来ている人たちは、子どもを全く見ていないで話に夢中になっていることが多い。ふれあいコーナーにせっかく入ってきているのに、ずっとしゃべっていたり、携帯ばかりやっているお母さんが少なくない。親が自分中心の行動をしている。見ていない、注意しない。ここに来たら、子どもが体験していること(例えば、動物の温かさ)を共感してあげて欲しい。

かつてと違うなあと思うことは、親が子どもへのかかわりが雑になったので、子どもが動物を扱うときも雑になってしまうのではないかということだ。

c. 今後の予定、希望など

広い公園内で、なんといってもここが一番人気のエリアなので、これからもがんばっていきたい。動物に直接触れるというのは大きな魅力だと思う。

今後は、障害を持っているお子さんの利用を増やしていきたい。昨年、依頼のあった区の障害児施設に一か所だけウサギとモルモットを連れて行った。その時にとても喜んでいただいた。その他については以下の通りである。

※飼育体験 サマースクール 小3～小6 14人 → 夏休み中に4回実施する。毎回2倍以上の申し込みがあるので、抽選で参加者を決めている。秋は、小1～小2の子どもと親を対象に実施している。

※小学校、幼稚園、保育園の遠足での利用あり。団体利用なので、予約制で、別のコーナーに団体コーナーを設けて30人までで15分のふれあい体験をしてもらっている。希望や困っていることなどについては、以下の点である。

- ・最近が高齢者(ケアセンター)のお散歩ルートにされていることが多い様子が見られる。動物を見て癒されて帰るのだと思う。これからは高齢者の方の利用を意識していくことになると思う。
- ・イベントには、多くの人に来ていただけるなら嬉しい。5月4日にヒツジの毛刈りイベントがある。毛を刈ってくれる職人さんが来てくれて、見ている子どもの中からランダムに10人に一緒に刈ってもらう(体験してもらう)イベントである。その後、ヒツジの毛を使ってフェルトボールを作るコーナーをやる。これは、昨年の毛をきれいに洗ったものを使用するもの。毎年、大変多くの人々が来場する。
- ・スタッフの人数に余裕があれば、もっといろいろなことに手を広げられると思う。
- ・これからも広報活動は区と連携してやっていく。

d. 幼児期に動物とふれあう経験について

なんといっても命の大切さが伝わると思う。動物が“生きているんだよ”ということが実感できるには、実際に触ってもらうのが一番大事だと思う。実際に動いたり、温かいことを感じられるからである。実際に触ることで、「動く～、このこ!」「あったかい!」「あったかあーい!」という声があがっている。触るから出てくる言葉だ。口でいくら「生きているんだよ」と言われても、小さい子どもにはわからないだろう。絵本やテレビで見ているのとは全然違うのである。ここにいると、動物の排泄物も目にするこ

なる。単に汚いということで片づけしないで、食べたら出るという教育の場にもなるのである。最近の親の中には、自分が動物が苦手で、ふれあいコーナーに入ってこないで、スタッフに頼んで子どもだけを中に入れようとする、「見るのは大丈夫でも触れない」という人がいるとのこと。今の住宅事情で、家で動物を飼えないので昔のように家で教えられないということもあるだろう。

ここに来たら、「臭い…！」と嫌がるのではなく、その匂いも動物、生きているということとして感じてもらいたい。担当者は「動物さんはお風呂に入れないうし、動物ってそういう匂いだよ」と話しているそうである。実際に触ることで、体験を通してわかる事は非常に大事なことでないだろうか。

4. まとめ — 幼児の動物ふれあい活動の意義と課題

東京都 23 区の無料で入園できる動物園におけるふれあい動物コーナーの担当者への聞き取り調査から、今の子どもたちの動物とのふれあい方について概ね次のような傾向が見られた。第一に、はじめは恐る恐るで慣れると笑顔でかかわる子どもが多い。第二に、動物の扱いが雑である。力加減がわからないままに、自分勝手なやり方で、動物の痛みや不快さを全く感じていない行動をするということである。そして、子どもの以上に異口同音に聞かれたことが、親の様子の変化であった。子どもと一緒に、「動物ふれあいコーナー」に来ているのにもかかわらず、全く子どもを見ていない親が多いということである。中でも印象的だったのは、「親が子どもに対して雑にかかっているの、子どもが動物に対して雑にかかわるのではないか」という指摘だった。また、「今の親の世代は、動物とのかかわりが薄かったのではないか」という意見もあった。住宅事情の関係で、家庭で動物を（飼いたくても）飼ったことがない、学校での動物飼育の経験が無いなどの影響もありそうだ。親自身の動物に対する姿勢が、子どもが動物にかかわる際のモデルになりうるということでもある。体質的に動物に触れることが不可能な場合を除き、どんな気持ちでどのように動物とかかわればいいのか、動物ふれあいコーナーで、親がスタッフと共に動物に正しく接していくことが必要であろう。

そして、生きている動物に触れることで、心臓の動きを手から感じたり、体温のぬくもりを感じて、「命」を実感できる機会であることを再認識できる。聞き取りを行った動物園の中には、聴診器を用意しており、子どもがモルモットの心臓の音を聴く姿を見たが、まさに動物から、「生きている」ということを体験から学んでいた。子どもの扱いが動物にとっては不快なことであると、動物から思いもよらぬ反撃があることで、嫌がっていることを知り、自分以外の他者の存在に気付くということにもつながるだろう。こうした動物とのふれあいで、とても気持ちが安らかになったり、落ち着いたり、癒されたりすることも多い。聞き取りをしている間にも、さまざま子どもと動物のふれ

あいの場面が見られた。

いわゆる檻の中にいる動物を、「見る」だけでも子どもにとって、好奇心を旺盛にし、「発見」を楽しむことで生物の多様性を理解し、生命の大切さを感じることができるであろう。¹³ 遠くから動物を見学する動物園とは違って、動物と直接ふれあうことができるのが「動物ふれあいコーナー」の何よりの特徴である。命ある動物と直接かかわれる体験が、いつのまにか動物とかかわる人の気持ちを豊かにしている。そして、幼児にとって、「命の存在」と「他者の存在」を教えてくれる上に、「命の大切さ」をも教えてくれる場になっていた。動物ふれあいコーナーを運営する側の努力は、子どもの育ちに大きくその意味を投げかけているようであった。

命の尊厳にかかわる重大な事件が後を絶たない昨今、幼少期からの命の尊重や命の価値についての教育的な指導は、いわゆる道徳教育と共に動物介在活動や動物介在教育を通して益々重要になるといえよう。今回の調査結果を踏まえ、さらに動物ふれあい活動を日常的に取り入れていくための手立てを追究していきたい。

<謝辞>

動物とのふれあい活動に日々尽力され大変お忙しい中、聞き取り調査に快くご協力いただきました、動物ふれあい活動をご担当されている責任者のみなさまに厚く御礼申し上げます。

【参考文献】

- 社団法人日本獣医師会（2009）「動物介在諸活動（動物介在活動・動物介在療法・動物介在教育）と獣医師及び獣医師会の役割」1-6頁
- 全国学校飼育動物研究会編著（2006）『学校・園での動物飼育の成果』緑書房
- 甲田菜穂子（2011）「身近な動物との関わりから学べること」『教育と医学』2011.7 86-92頁
- 根岸奈央他（2014）「子供動物園のふれあい施設における入場者の行動」東京農業大学農学集報59（2）,157-162頁
- 片山由美他（2009年）「幼稚園教育における5領域の総合的な指導への一考察—動物の世話をとおして—」花園大学社会福祉学部研究紀要 第17号 13-21頁
- 藤岡久美子（2013）「子どもの発達と動物の関わり—動物介在教育の展望—」山形大学大学院教育実践研究科年報（4） 4-11頁
- 川添敏弘（2009）『アニマル・セラピー』駿河台出版社
- 並木美砂子（2008）『子どもが動物に出会うとき』風間書房

- 1 百瀬ユカリ（2015）「幼稚園及び保育所における動物介在活動の意義—動物飼育活動を中心に一」大東文化大学紀要第53号71-79頁
- 2 文部科学省（2008）幼稚園教育要領
- 3 厚生労働省（2008）保育所保育指針
- 4 谷田創・木場有紀（2014）『保育者と教師のための動物介在教育入門』岩波書店25-26頁
- 5 谷田創他、前掲書、28-30頁

- 6 根岸奈央他（2014）「子供動物園のふれあい施設における入場者の行動」東京農業大学農学集報59（2）,157-162頁
古川紗織他（2013）「モルモットのふれあいコーナー；命のぬくもりを伝える動物園の教育活動例」博物館研究48（5）,16-18頁
大丸秀士（2006）「失われる動物体験 求められるふれあい—動物園の社会的役割について」特集 家畜とペット、東北学[第2期]（9）,39-47頁
並木美砂子（1999）「動物園における「生きている動物」の教材化—子ども動物園を中心として その4 来園者および「動物との触れ合い」の活動評価試論」博物館学雑誌25（1）,19-33頁
- 7 前掲 大丸秀士「失われる動物体験 求められるふれあい—動物園の社会的役割について」
- 8 目黒区公式ホームページ（みどりと公園課担当）www.city.meguro.tokyo.jp/shisetsu/.../himonya.htmlより（2015.3.20最終閲覧）
- 9 動物取扱業者標識 名称：公益財団法人ハーモニセンター 取扱の種別 展示
登録番号 第001576号 登録年月日 平成19年6月6日
※前掲 目黒区ホームページより
- 10 前出 公益財団法人ハーモニセンター 東京都渋谷区代々木神園町3-1
国立オリンピック記念青少年総合センター内
- 11 板橋区役所ホームページ（みどりと公園課施設運営グループ）www.city.itabashi.tokyo.jp
より（2015.3.20最終閲覧）
- 12 公益財団法人えどがわ環境財団 公式ホームページedogawa-kankyozaidan.jp/zoo
（2015.3.20最終閲覧）
- 13 林幸治（2008）「幼児教育における動物園の役割—動物園を楽しむ 発見！キリンの眉毛—」近畿大学九州短期大学研究紀要第38号 49-58頁

（2015年3月24日受理）